

# 患者から医師へのシグナル

・第71回・

## 闘病生活を明るい思い出に変える

最能 一夫

### とにかく必死に働いた

私は1942年、北海道上川郡上川町で生まれました。近年は女子スキージャンプの高梨沙羅選手の出身地として知られる町で、母校の中学校も同じです。小学6年生頃からあまり学校には通わず働いていたので、中学校の卒業証書も学校に保管されたまま、いまだに受け取ることができていません。当時、ご飯はひえめしを食べるほど生活は限りなく苦しく、ひとり富良野まで出稼ぎにも行きました。

1962年に結婚してからは一層、家族を養うために昼夜を通して働きました。ベーカリーに勤めていましたが給料が考えられないほど安く、ざりざ

りの生活でした。ベーカリーが終わると町へ出て、夜行列車の駅弁売りなどさまざまなアルバイトをしました。少しでも稼ぎを増やすために、1970年に本州へ渡りました。北海道を出てはじめて働いたのは、埼玉県加須市の建設現場です。いただいた給料の高さに驚いて事務所で「間違いではないか？」と問い、「あなたの稼いだ給料だよ」といわれたのを覚えています。各地の現場を経て、栃木市に住むことになりました。家を建てる場所は、息子の小児喘息を治してやりたい一心で、喘息治療で有名な西方病院の近くを選びました。

### 息苦しさが我慢の限界に

体力に任せて長年働き続けましたが、体調を崩

……▶ SIGNALS FROM PATIENT TO DOCTOR \* No.71 ……▶ SIGNALS FROM PATIENT TO

したのは10年前の62歳のときです。8月の終わりの残暑が厳しい折でした。建設現場で測量の釘打ち作業をしている最中に胸が圧迫されて苦しくなり、そのまま倒れました。周りにいた同僚たちは大騒ぎです。事務所へ運ばれて横になり、冷たい飲み物をいただくなど手当てを受けていましたが、病院へ行って仕事を休むようにいわれました。病院で検査を受けた結果、肺気腫と診断されました。実をいうと、倒れる5、6年前から日常生活で多少の息苦しさを感じていましたが、我慢をしていたのです。気胸を起こしているということで、とちの木病院へ入院し、胸腔ドレナージを受けて約2週間で退院しました。

若い頃からタバコを1日1箱吸い続けてきた私の肺はひどい状態だったようで、先生からは「今までたくさんタバコを吸ってきたでしょう？」といわれました。急にやめるのは難しいだろうから、毎日少しずつ量を減らしていくように先生からア

ドバイスをいただきましたが、それではいつまでもたっても終わる気がしなかったので、一気にやめる決断をしました。禁煙は想像以上につらかったです。ご飯を食べるときにお箸をもつと、タバコにみえてしまうほどでした。ちょうどその頃、自宅の庭の工事があり、作業員の方が軒先でタバコ休憩をすることがありました。煙が部屋へ流れてくるとたまらない気持ちになり、「申し訳ないけれど、吸いたくなるからやめてくれないか」とお願いしました。タバコ同様、大好きだったお酒もやめました。いうまでもなく、長年の喫煙は私が肺気腫を発症した最大の原因ですが、それだけが理由ではなく、若い頃に重ねた無理の影響がこの年齢になって出てきた部分もあるのではないかと自分では考えています。

### 先生の言葉に救われて

1度目の入院から2年後、倒れたときと同じよ